

研究室のメンバーと一緒に砂糖水を作ったり、梅酒を注いだり、ポップを描いたり。この日用意していた梅酒は島の方の自家製で、今年の四月から浸け始め、まだ四ヶ月しか経っていないが味はとても濃い。ボトルになみなみと注がれた梅酒はなめらかに揺れていて、視覚からも私を刺激てくる。ああ呑みたい。我慢、我慢。

遠くからアツい声が聞こえてくる。  
その声はだんだんと近づいてくる。  
「さあもうすぐ来るよ。準備して！」  
騒がしい時間がやつてきた。

# 富賀神社大祭 集まる熱氣



2013年  
(平成25年)  
8月11日  
日曜日

あしたばん編集部  
発行所：加藤文俊研究室  
info@ashitaban.net  
<http://ashitaban.net/>

第三十九号

# 一本の木



た。生き生きとした姿がこの祭りで爆発するのではないかどうか。私のアツい三宅島生活はここからスタートした。

みんなに枝一本の木の印象を受けたが、かつた。はた来たい」らは、とてご存じのんは三五年の出来事を天候や、そに会つた人き込む。そ

を届かせて、その場全体を  
ようにしてしまう、そんなん  
た。はじめてのひとばかり  
その空間はとても心地いい  
じめて訪れたひとにも「また  
と思わせる空間をつくる彼  
もかつこいい。

「十年後、二十年後に見るのが樂み。老後が楽しみになる。みんなもやつてみな」。この言葉を何度も繰り返していた。それは想いが強いからか、それともお酒が入っていたからか。きつとどちらもだ。

わたしも記憶に留めたい出来事をスケジュール帳に書いている。かずさんの話を聞いて、これは習慣として続けていこうと強く思った。そしてわたしも、かずさんのように楽しそうに出を話すのだ。



この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

今日もしたたかに。

「どうもありがとうございました」「お世話をになりました」「また来ます」。こんな声が新鼻荘に響く。記念写真を撮り、お客様を最後まで見送るのは、平田節子さん(通称おかみさん)である。「あ、いいひとたちだったね」。すがすがしい声で言う。そして、達成感を伺わせる表情をしていた。

民宿には、様々なお客さんが来る。ときには教員の集まり、ときには高校生、ときには昔なじみの仲間同士、もちろんお偉いさんだつて来る。しかし、おかみさんの態度は一切かわらない。皆に、同じ接し方をする。自然とお客さんも気さくにおかみさんと会話を楽しめる。



(原田ふくみ)

食事のときには、お茶を淹れ、絶えずお客様と話をする。食事の時間もお客様の要望に答える。お客様が宿に着くやいなや、「お風呂が沸いていますよ」と声を掛ける。日々の掃除から、庭の手入れまですべてにおいて手が行き届く。不自由がないよう、お客様への気遣いは「常に」だ。お客様が外出する日中は、おかみさんの緊張感が唯一解ける。「お客様がいないと気が楽だわ」と冗談まじりで言う。

そんなおかみさんは新鼻荘を一人で守り続けて二〇年目。ふとした瞬間に、おかみさんが自身のことを語ってくれる。中高生の六七人のバーベキューをして、様々なことを考えたり、工夫をしたり。かなりの覚悟をしていた。「一度経験すれば、怖いものなんてないのよ」とおかみさん。お客様を見送るときの表情が頭に浮かぶ。ひとは、経験をし、強くなる。しかし、おかみさんは語るからこそ、人の心を動かす。おかみさんの言葉は、どれもおかみさん色に染まっていた。とても「したたか」だ。強さがあり、包容力があり、柔軟性がある。だからこそ、お客様は満足し、笑顔になるのだろう。そして「ありがとう」の声が、笑顔が新鼻荘を満たす。おかみさんも、笑顔である。このよう二〇年間の日々の経験が、この「したたか」を生み出したのだろう。